参 考 資 料

気象経過及び農作物災害の概要

■気象の概要

1　１～４月

気温は、１月上旬から高くなり、３月上旬を除けば、平年に比べ高く、特に、４月は平年よりかなり高めに推移した。

タカトウヒガンザクラの開花日は４月５日で平年より３日遅くなった。

2　５～８月

５月から８月の天気は数日の周期で変化し、前線や低気圧の影響で大雨となった所もあった。関東甲信地域の梅雨入りは６月 21 日(平年比＋14 日)、梅雨明けは７月 18 日(平年比－１日)であった。

期間を通じて、気温が高い傾向であったが、７月から８月の気温は高く推移した。

６月下旬は大気の状態が不安定となって、雨や雷雨となり、場所によって非常に激しく降った。

3　９～12 月

９月から 11 月にかけては、平均気温は高く推移したが、12 月は概ね平年並みに低下した。

12 月の降水量は平年と比べ、かなり少なかった。

■主な農作物災害の概要

1　凍霜害被害

５月９日から 10 日にかけて、急激に気温が低下したことにより凍霜害が発生した。

なしなどの果樹類では胚珠褐変が一部で確認されたほか、スイートコーンなどの野菜類でも苗の枯死や葉の褐変の大きな被害とはならなかった。

写真１　ナシ幼果に対する低温障害

写真２　凍霜害によるスイートコーンの葉枯れ

2　多雨よる湿害

３月下旬から４月上旬にかけては降雨が多く、麦類では滞水したほ場も一部で見られ、湿害が発生した。

また、５月中下旬、６月下旬から７月上旬にかけても雨が多く、そばや野菜等で湿害散見された。

3　高温による生育障害と虫害の発生

７月下旬から８月中旬にかけては著しい高温となり、施設栽培品目を中心にではヤケなどの障害が見られた。

また、大豆では高温のほかカメムシ類による被害が目立ち、子実肥大不良による青立ちが多く発生し、大幅な減収となった。

写真３　青立ちした大豆ほ場(10 月 24 日)

(技術経営係)

令和6年農作物の生育状況(主要家畜含む)

1　作　物

(1) 水稲

育苗：播種は４月 14 日頃がピークとみられ、作業は順調に行われた。育苗期間の生育は、高温傾向で徒長気味となり、一部でヤケやもみ枯れ細菌病の発生もあったが概ね順当に経過した。

本田：田植えは５月連休中から本格的に始まり、盛期は５月 19 日頃とみられる。田植後は徒長苗や強風等が原因による植傷みも一部見られたが、その後は概ね順調に経過した。直播栽培は５月４日頃から 10 日頃にかけて播種され、全般に順調に出芽揃いを迎えた。

気温や日照時間が確保されたことにより初期生育も順調に経過、田植後 30 日（６月 14 日）の伊那米総合試験地の「コシヒカリ」の草丈は平年比 109%とやや高く、特に茎数は平年比 144%で多くなり、生育は前進傾向であった。

田植後 40 日（６月 24 日）の「コシヒカリ」の生育も、草丈は平年比 109%、茎数は平年比 117%で、平年を上回った。田植後 50 日（７月４日）の「コシヒカリ」の草丈は平年比 105%、茎数は平年比 105%で、最高分げつ期を過ぎた。「コシヒカリ」は７月４日に幼穂形成期となり、昨年よりも４日早く、平年よりも３日早い状況であった。

田植後 60 日（７月 14 日）の「コシヒカリ」は、草丈は平年比 103%、茎数は平年比 103%で、概ね平年並み。７月下旬～８月上旬にかけては高温傾向で推移し、「コシヒカリ」の出穂期は７月 27 日(平年比-４日、前年比-２日)であった。

葉いもちは感染好適条件が６月 30 日～７月３日、７月 14～16 日にかけてまとまってみられたが、７月 18 日以降は少なくなり（別紙参照）、葉いもちが発生したほ場でも上位葉への伸展は少なかった。８月は高温傾向で、穂いもちの発生も概ね少なかった。

斑点米カメムシ類については、特にホソハリカメムシの発生が目立ち、全般的に斑点米の発生が多かった。

成熟期（帯緑色籾歩合５%以下）は、８月が高温傾向で推移し平年よりもかなり早く、「コシヒカリ」で９月７日（平年比-９日、前年比-３日）であった。

収穫は例年よりも早く、９月４日からカントリーが本格的に稼働し、９月は比較的、好天日が多く、作業は順調に経過した。刈り取りのピークは９月 15 日頃で、概ね 10 月５日頃に概ね終了した。

品質低下要因としては、カメムシによる斑点米が最も高かった。次いで、刈り遅れが影響した胴割粒で、収穫後半に多くなった。高温登熟障害による白未熟粒等は全般に少なかった。

・農林水産省 12 月 10 日公表の作況

全国　101（101）長野県 101（100）南信 100（100）

長野県 10a 当たり収量　620 kg（614kg）

南信　620kg（623kg）　　※（ ）は前年値

(2) 麦類（６年産）

大麦、小麦ともに適期には種が始まり、10 月下旬から 11 月上旬にかけては種され(伊那米総合試験地は10月20日は種)、作業は順調に進み、出芽と初期生育も順調であった。11 月上旬と 12 月中旬は高温で推移し、生育はやや前進傾向となった。

１月から２月にかけては、気温は概ね高温で推移し、特に２月中旬の気温が高く、幼穂形成期は平年よりも早まったが、３月上旬は気温が低下し、生育は停滞した。越冬後の生育量は並～やや過剰気味で、大麦では肥切れにより葉が黄化するほ場もみられた。３月下旬と４月上旬は降雨が多く、一部で湿害が発生した。

４月は高温傾向となり、停滞していた生育は前進、伊那米総合試験地の大麦「ファイバースノウ」の出穂期は４月 24 日（平年比-２日、前年比＋５日）、小麦「東山 53 号（ハナチカラ）」の出穂期は４月 29 日（平年比-４日、前年比-１日）で、平年よりも早まった。

赤かび病は小麦で５月中下旬の降雨が影響して病勢進展につながり、６月に赤かび病が散見されたが、防除の効果もあり、かび毒の DON は基準値以下に抑えられた。

成熟期以降、収穫作業が行われ、大麦「ファイバースノウ」の収量は平年よりも少なく、平均単収は314kg/10aで、前年対比91％であった。品質は硝子率が許容値内に入らずＣランクとなった。

小麦「東山53号（ハナチカラ）」は６月下旬の多雨が影響し、赤かび病の発生のほか、後半に収穫したものは穂発芽が目立ち、品質が低下した（B ランク）。収量は多く、平均単収は362kg/10a、前年対比130％であった。

(3)大豆

標準播種の盛期は６月16日頃で、概ね順調に播種作業が行われ、出芽も概ね良好であった。麦後の晩播も６月下旬から７月上旬にかけて播種されたが、降雨も多く、作業は遅れ気味となり、湿害による生育への影響が一部で見られた。

開花期は８月18日頃で、８月以降は著しい高温となり、着莢にも影響したほかカメムシ類の発生が目立ち、ホソヘリカメムシのほかイチモンジカメムシやアオクサカメムシが多く、吸汁害により子実が加害され、肥大不良で株自体が青立ちとなった。

収穫期の11月に入っても、青立ちが多く、収穫作業は遅延気味となった。収量は全般的に低く、平均単収は103kg/10aで、ほ場によっては極端に少ないほか、奇形や虫害粒も多く、品質的にも不良が目立った。

連作圃場では、帰化アサガオ類、ホソアオゲイトウなど難防除雑草が増加傾向にある。

(4) そば

ア　夏そば

５月中下旬と６月下旬の多雨により、出芽、生育不良のほ場が散見された。登熟は概ね順調であったが、湿害による生育不良もあり、平均単収は40kg程度/10aであった。

イ　秋そば

降雨により一部で出芽に影響したが、全般的には順調に経過した。高温の影響で成熟期は早まり、収穫作業は10月7日頃から本格的に始まった。

平均単収は60kg程度/10aで、容積重が軽く、充実不良など品質低下が目立った。

（福本）

２　果　樹

(1) りんご

１月下旬の低温により樹体の裂傷がみられた。しかし、暖冬により平年と比べ生育が早まった。５月上旬の降霜により一部で「シナノリップ」の幼果に亀裂が入り、その後、奇形果の発生により品質低下につながった。伊那市の「ふじ」定点の満開日は４月20日（平年差−３日）と早い開花であった。

今年は梅雨明け後から著しい高温となり、その後、極端な降雨や８月の高温により、「シナノリップ」、「つがる」、「シナノスイート」などで日焼け果や着色不良、内部先行、収穫前落果が生じた。また、晩生種では、収穫前に果実の赤道部の胴割が発生し、生産量の低下につながった。病害に関しては、８月に夜間の降雨により、炭そ病や輪紋病が多発生した。

虫害に関しては、幼果時期からカメムシ類の被害がみられ、梅雨明け後被害が増加した。被害果が多くみられ、ＪＡではカメムシ類の被害による果実の特別受入を実施した。

本年のりんご全体の生産量は、前年度より（前年比75%・生産状況調査より）となった。

(2) なし

中川村の「南水」開花始期は４月13日で（平年比−１日）、開花期時に低温とならなかったため、平年に比べ結実が良好であった。肥大は全般的に平年並み～やや大玉傾向であった。

また、高温であったため、果実の硬度・酸度の低下が早く、糖度が高かった一方で、「豊水」や「南水」ではみつ症がみられ、品質低下となった。病害虫は、黒星病が一部の園地でみられた。

(3) ぶどう

発芽がばらついたが、凍霜害など災害による影響は少なかった。粒品質は非常に良好で、生育前半の粒肥大も良好であったが、欧州系の「シャインマスカット」などでは、一部園地で縮果症が発生した。

宮田村の醸造用ぶどう「ヤマソービニオン」は、５月10日の降霜で新梢先端の枯れがみられ、前年より収量が低下した。病害は、雨に起因するべと病・晩腐病、黒とう病が発生した。（堀）

３　野　菜

(1) アスパラガス

１月～２月は暖冬傾向であったが、３月上中旬低温傾向になり、出荷始めの出荷量は少なかった。しかし、４月以降は高温傾向で萌芽が進み、春芽のピークは４月下旬となった。夏芽は秋も高温傾向が続き、出荷終わりは平年より遅くまで続いた。

作柄は、高温傾向の中、爆裂茎等が発生し、アザミウマ類の加害も見られた。また、茎枯病、褐斑病等も、一部発生がみられた。

(2) 白ねぎ

春先の高温傾向で、凍霜害の被害もなく全体的に初期生育は順調であった。梅雨明け以降、高温で推移したため害虫の発生が増加し、アザミウマ類は８月後半から 10 月にかけて発生が多かった。さび病の発生は昨年同様例年より少なかった。

生育は、全体に高温傾向であったが、概ね順調であった。

(3) ブロッコリー

春作型については、３月下旬から４月上旬の天候不良で定植が進まなかったが、それ以降は順調に進み、定植ピークは４月中旬頃であった。凍霜害の被害はなかったが、５月上旬の夜温が低くやや生育が遅延したが、概ね品質に影響する病害虫の発生は少なく順調であった。

秋作型については、７月下旬から８月中旬定植が、高温で活着不良となり、それ以降の生育期間中の降雨により、黒すす病や細菌性病害が発生し作柄不良のほ場が見受けられた。

(4) その他の品目

スイカについては、着果は概ね良好であったがりつる枯病、炭疽病の発生がみられた。

夏秋イチゴでアザミウマ類による被害や萎黄病の発生が一部ほ場も見受けられた。

冬イチゴでは、育苗中の炭疽病が一部圃場で見受けられた。また、秋の高温で花芽分化が遅れ、出雷がまばらになった。

（田中）

４　花　き

(1) アルストロメリア

切花ピークとなる３～４月の開花は順調で、販売環境は悪くなく、出荷は計画的に進んだ。更新期のほ場では５月末までに改植作業を終了した。

残暑の影響で、夜温が 20℃を超える日が続くなど、立ち遅れ、葉焼けや花焼けの発生が多かった。

害虫は、ハダニ類、アザミウマ類が栽培期間を通して、晩秋期にはオオタバコガが一部地域で多発しました。11～12 月は気温が低下し、日照時間が確保され、生育開花は概ね順調に経過した。

(2) カーネーション

越冬～春の生育は概ね順調に経過した。その後、３月上旬～５月上旬の高温の影響もあり、１番花の切り花は前進傾向となった。また、梅雨明け後の異常な高温の影響もあり、２番花の生育は軟弱傾向となった。その後も、軟弱傾向は改善されず、例年に比べ切り花品質は劣るものが多かった。

(3) トルコギキョウ

季咲き作型は３月から定植が始まり、生育は前進傾向で、３月上旬～５月上旬の高温の影響もあり、生育は前倒しとなった。本年度は、どの作型でも生育期が高温で推移した影響もあり、８月の盆前出荷、10 月前半出荷予定の作型まで、生育や開花が前進傾向となった。合わせて、品種によっては、抑制作型において短茎開花が目立った。

近年県内で発生の目立つ立枯病は、クロルピクリン剤による土壌消毒の効果や品種選定もあり、発生はほぼ抑えられた。一方で、青株根腐病の発生が目立つほ場が散見された。

(4) コギク

２月の高温、３月の低温の影響もあり立茎本数はやや少ない傾向でしたが、影響は少なく順調に経過した。一方で、形質のバラツキによる生育のムラや品種の混ざりなどが散見され、改植時の母株選定の必要性がある。栽培者数は昨年同様減少傾向で、生産量は減少している。

(5) シクラメン

本年度は最終鉢への鉢上げは、概ね例年どおりに行われた。ガーデンシクラメンは９月中旬

から出荷が始まった。４～６号鉢は平年並みの出荷開始となった。一部のほ場で炭疽病、葉腐細菌病、軟腐病が発生し、作柄不良となった。

（小池）

５　畜　産

(1) 家畜

畜産全般で昨年に引き続き、飼料や資材等の価格高騰等による経営悪化が深刻化しており、離農する経営体も増えている。経営改善にあたり、今後の需要動向や世界情勢が注視されている。

ア　酪農

管内では酪農家戸数は減少傾向であり、生産コストの増加、子牛販売価格の低迷等、厳しい経営状況が続いている。一方で、後継者の就農等に合わせた各種事業の活用による規模拡大やスマート畜産技術の導入が進んでおり、一戸あたりの飼養頭数は増加している。また、規模拡大や飼料価格の高騰等により、一戸当たりの自給飼料生産面積も拡大傾向となっている。

本年度の夏は昨年以上の高温となり、暑熱対策として大型ファンや細霧機の導入が進んでいるが、管内の生乳生産量も前年比 96.8%で減少し、繁殖にも影響がでた。

イ　肉用牛

牛枝肉卸売価格は年間を通して前年を下回り、肉用牛肥育経営安定交付金が交付される状況となった。それに伴い、肥育農家が素牛導入を控えたことから和牛子牛価格も下落し、長野県中央家畜市場の販売価格は、肉用子牛保証基準価格を下回る状況となった。一方で、酪農家の副産物である子牛価格の安定化のため、管内では受精卵移植による和牛子牛生産数が増加している。

鶏卵は、業務用需要が回復基調にあり家計消費も順調で、夏以降は猛暑の影響により供給量が一時的に減少したことや季節性の需要も高まり、価格は上昇傾向にある。

家畜伝染病については、農場のバイオセキュリティレベル向上や衛生管理の徹底等により管内含め県内での発生はなかった。引き続き、緊急時の防疫演習の実施等を市町村等と協力し行っていく。

(2) 飼料作物

ア　飼料用とうもろこし

５月 10 日頃からは種作業が始まり、天候も安定したことから発芽、生育は順調であった。６月は高温と適度な降雨により生育は前進傾向。一部で湿害と雑草の繁茂が見られ、降雨により除草剤の散布が遅れているほ場があった。８月中旬まで生育は前進傾向、生育量は平年並みで経過していたが、８月下旬の天候不順で成熟はやや遅くなった。８月中旬頃からほ場にアレチウリが見え始め、被害が甚大なほ場では、１割～５割ほどの減収となったほか、収穫できないほ場も見られた。

刈取りは８月下旬から始まり、天候は比較的安定していることから順調に進んだ。登熟は高温の影響により前進傾向で、10 月 20 日頃まで収穫が続けられ、収量は概ね平年並みとなった。サイレージ品質は概ね良好であった。

イ　牧草類

単年牧草のイタリアンライグラス等は、発芽・越冬は順調で、３月の低温でやや停滞したものの、４月以降の高温で生育は前進し、例年よりやや早い出穂となった。刈取りは概ね順調に進んだが、５月中旬以降天気が不安定となり、一部で刈遅れが発生した。５月上旬の刈取り後、高温で推移したことから再生が良く、２番草まで刈取りができた生産者が多かった。

永年牧草も生育は３月に停滞、４月以降は前進し、オーチャードで例年よりやや早い出穂となった。刈取りも昨年よりやや早く始まったが、天候の影響から一部で刈遅れとなった。梅雨入り前から２番草の一部が刈取られ、高温で推移しため再生は早かった。６月下旬以降は降雨が続き、本格的な刈取りは梅雨明け後となったが、不安定な天候により一部で品質低下や刈遅れが見られた。３番草以降は、２番草を適期に収穫できたところでは再生は順調、一部刈遅れた圃場では雑草の繁茂が目立った。

（唐澤）

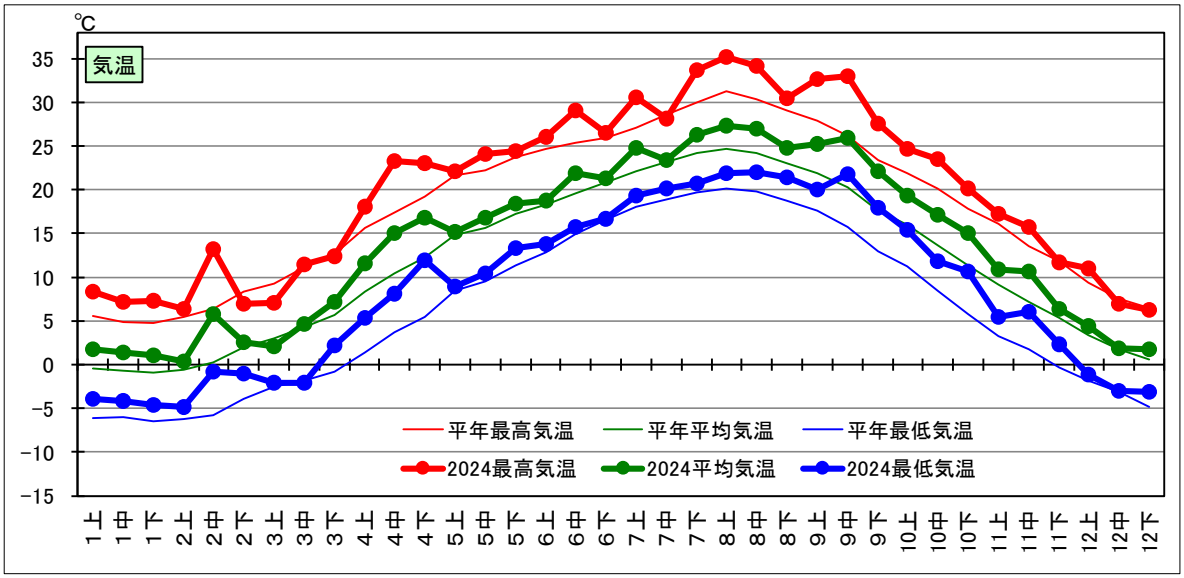
６　菌　茸

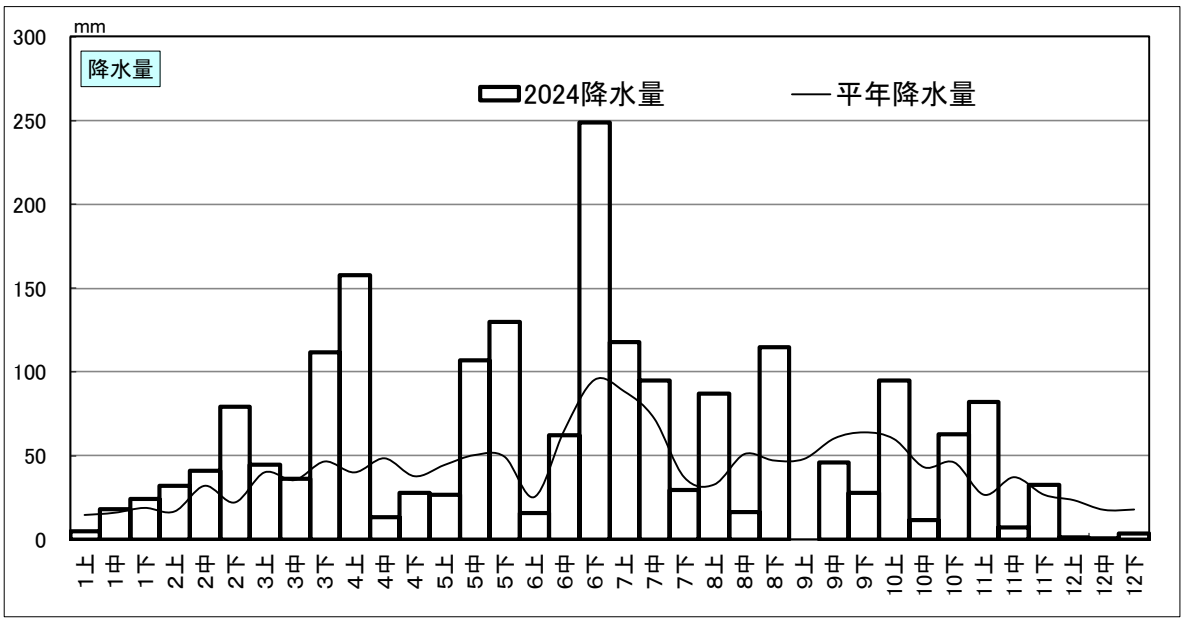
ブナシメジ栽培においては品種の更新が進み、それに伴う環境管理の変更が進められている。一部のブナシメジ培養施設でキノコバエの被害による害菌汚染がみられた。

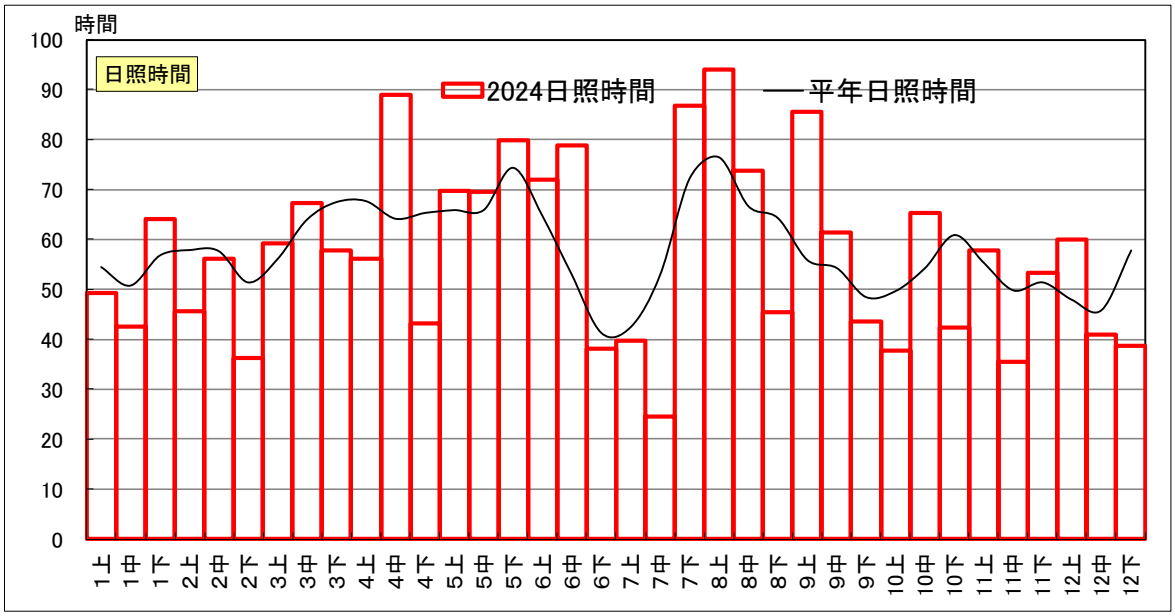
（田中）

2024年気象表（アメダス伊那観測所　標高633m）

上伊那農業農村支援センター







※平年値：1993～2020年の28年間

令和６年度業務分担名簿

上伊那農業農村支援センター技術経営普及課

職　名		氏　名	担当項目・市町村	担　当　事　務
所　長		西澤　俊樹	総括	
企画幹兼 技術経営普及課長		小林　佳昭	課総括	普及活動計画、普及職員研修、農業経営士、農業表彰
技術経営係	副参事兼 課長補佐兼 技術経営係長	福本　匡志	係総括・作物 ・スマート農業	農作業安全、知的財産
	主　任 普及指導員	唐澤　陽子	畜産・経営	制度資金
	主　任 普及指導員	田中　敬志	野菜・菌茸・病害虫・ 特用作物	植物防疫、農薬相談員
	主　任 普及指導員	小池　賢人	花き	農業士、生育状況、情報
	技　師	堀　琴音	果樹・土壌肥料	農業災害
地域第一係	専門幹兼 地域第一係長	小池　英彦	係総括・伊那市 ・集落営農	伊那北部農業振興会議
	課長補佐	宮下　純	辰野町 ・マーケティング	６次産業化、農薬相談員
	担当係長	原　亮太	担い手	就農コーディネーター、カイゼン
	普及指導員	濵　昌憲	箕輪町・南箕輪村	ＰＡＬネット、環境、ＧＡＰ
	行政事務員	安藤　こず枝		調査・展示ほ補助
地域第二係	専門幹兼 地域第二係長	伊藤　博之	係総括・駒ヶ根市	伊南農振協、農村生活マイスター
	技　師	青沼　由希菜	飯島町・女性農業者	農薬相談員
	技　師	坂本　舜太	宮田村・鳥獣害対策	採種ほ
	技　師	岡野　千文	中川村・農産物活用	食育・地産地消